

修学旅行に寄せて

校長 土居 正 明

卒業式に語られる高校時代の思い出に、必ず登場する修学旅行。日頃教室で机を並べる仲間とあるいは先生と、非日常の空間を共有する。仲間とともに日常から離れ、知らない土地を訪ねて、自然や文化を体感し、いろいろな出会いに心ときめくことでしょう。また、「寝食を共にする」と、いつも近くにいた友の新しい一面を見つけ、先生との距離もぐっと近づき、絆が生まれることでしょう。言うまでもなく、気ままな個人旅行とは一線を画します。仲間という集団の中で周囲を気遣い、進んで新しい価値を獲得しようとしてこそ、意味のある修学旅行となると確信します。

修学旅行は、どうやら日本独特の行事のようです。いろいろと見解はあるようですが、明治19年(1886)に東京師範学校が計画した「長途遠足」が始まりと言われていきます。「一ハ兵練ヲ演習セシメ、一ハ実地ニ就テ學術ヲ研究セシムルノ目的」と書かれ、どちらかという于行軍訓練の色彩があり、東京から千葉方面へ1日7里ほどを歩こうとしていたようです。当時の校長が、7里は生徒の疲れが激しく、学术研究ができないと抗議している書簡が残り、翌年から修学旅行と名を変えたと記録にあります。こんな時代から続いている修学旅行を少し考えてみてもいいかもしれません。

今年度の行程を見ると、北陸、能登から上越、信州。金沢、千里浜、親不知、糸魚川、白馬、犀川と興味ある地名が並んでいます。歴史から切り取ってもよし、地形から切り取ってもよし。伝統産業や先端産業、あるいは観光産業から切り取って見てもよし。はたまた、文学に触れてもよし、登山家の視点で見ても興味深いところばかりです。「学术研究」とは言いませんが、ぼーっと終わるのではなく、何かを心に刻んで帰ってきてくれることを期待しています。

できれば体調を崩すことなく、心から楽しい旅行であったという報告を待っています。